薬剤部だより No. 4

平成３０年５月２２日　改訂
兵庫県立がんセンター
薬剤部　発行

抗がん剤の副作用について No. 4

脱　毛　・　皮　膚　障　害

はじめに

抗がん剤の副作用により起こる脱毛や皮膚障害は、生命に重大な影響を及ぼすことが少なく、他の副作用と比較すると軽視されがちです。また、患者様も、少し爪が変形したり皮膚がカサカサしても、主治医等に伝えることなく耐えながら、治療を継続されていることがあります。

そこで、今回は脱毛・皮膚障害について紹介します。

脱毛

脱毛はなぜ起こるのですか？

人の体毛は、毛母細胞の分化によって成長します。この細胞は、正常細胞の中でも、特に細胞分裂が活発で、抗がん剤の作用を受けやすいため、障害を受けて脱毛します。一般的に脱毛は、抗がん剤投与開始から２～３週間後に始まることが多く、最終の抗がん剤投与から３～６ヶ月後には再び生えてきます。生えかわった髪の毛は、色や質が変わることがあります。

脱毛を起こしやすい抗がん剤　　（　）は商品名

90%～50%

パクリタキセル、ドセタキセル（タキソテール）、エトポシド（ラステット）、エピルビシン（ファルモルビシン）、ドキソルビシン（アドリアシン）、イダルビシン（イダマイシン）、イホスファミド（イホマイド）、イリノテカン（カンプト）

50%～20%

ビンクリスチン（オンコビン）、アクチノマイシン（コスメゲン）、ブレオマイシン（ブレオ）、シクロホスファミド（エンドキサン）、ペプロマイシン（ペプレオ）

脱毛に対する準備と脱毛が始まったらどうしたらよいでしょうか？

（脱毛前）

・毛髪の長い方は、あらかじめ短くカットしておくと脱毛後の手入れが楽になる場合があります。

・脱毛が進む前に、かつら、帽子などを準備しておきましょう。

（脱毛が始まったら）

・洗髪の回数を減らし、シャンプーは中性のものを使用しましょう。脱毛を恐れてまったく洗髪しなくなるのは、頭皮の刺激不足や不潔になり、かえって逆効果です。

・ブラシは、柔らかくて目の粗いものを使用しましょう。
サテンの枕カバーの使用もよいでしょう。

・パーマや毛染めを避け、ドライヤーの使用も避けた方がよいでしょう。

・頭皮に直射日光が当たらないよう工夫しましょう。

・かつら・帽子・スカーフなど上手に利用しましょう。

皮膚障害

皮膚障害としては、かぶれ・赤み・かゆみ・じんましん・かさつき・皮膚や爪の黒ずみ及びはがれ、爪の変形、光過敏症（光の刺激に弱い）、注射部位の腫れや痛みなどがあげられます。このような症状があれば、主治医等に伝えましょう。

皮膚障害はなぜ起こるのですか？

皮膚障害は軽度のものから重篤なものまであり、原因も様々です。

(1) 抗がん剤の作用機序に関係するもの

一般的に抗がん剤は、異常増殖するがん細胞を殺しますが、がん細胞のみでなく、皮膚や爪などの正常細胞にも障害を与えます。その結果、弾力がなくなる、カサカサする、はがれる、黒ずむ、皮膚が薄くなり傷つきやすい、傷が治りにくいなどの症状がおきます。

(2) 抗がん剤に対するアレルギー反応によるもの

抗がん剤が投与されたことにより、ヒスタミンをはじめとする血管の収縮・弛緩などアレルギー反応に関係する物質が分泌され、皮膚の赤み、じんましんなどが起こります。これは、抗がん剤投与開始から７２時間以内に起こり、即時型のアレルギー反応と言われます。その他、リンパ球の反応がひき起こされ、接触性皮膚炎などの皮膚炎、皮膚が黒ずむ、弾力がなくなる、光の刺激に弱くなるなどの症状が起こります。

(3) その他のもの

以前、放射線治療を行った部位が赤くなったり、発疹が生じたりすることがあります。また、注射部位が腫れる、痛むなどの症状をひき起こすことがあります。

皮膚障害（皮膚・爪）に対する薬物療法

治療に使われるお薬としては、抗ヒスタミン薬、抗アレルギー薬、ステロイド薬、保湿剤・皮膚保護剤などの軟膏やクリームがあります。

皮膚障害（皮膚・爪）に対する生活上の注意

日常生活では、手袋の着用、刺激の少ない石鹸を使用しての入浴・シャワーなど、皮膚を清潔に保つ工夫が有効です。